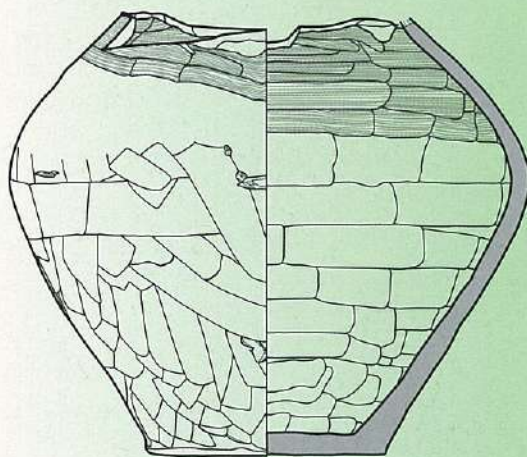
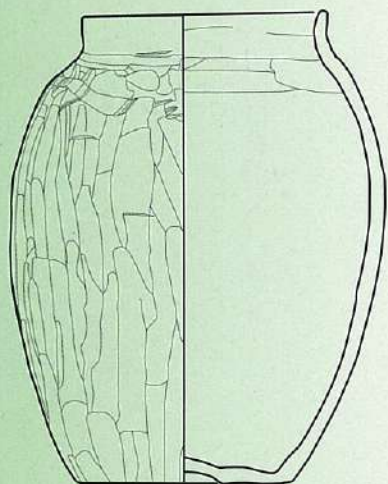


古代・中世の武蔵国の骨蔵器



ごあいさつ

立正大学の展示資料の一つに、古代・中世の骨蔵器こつぽうきがあります。現在は死後に火葬を行い、骨壺に遺骨を入れてお墓に納骨するのが一般的となっています。火葬は仏教とともに我が国に伝えられ、僧道昭どうしやうが文武天皇4(700)年に火葬されたことが最初と伝えられています。その後、天皇や官人層に受け入れられ、普及するようになりました。この火葬の普及に伴って、階層に従ってさまざまな骨蔵器が用いられるようになりました。

武蔵国(現埼玉県・東京都・神奈川県の一部)では、埼玉県南部、神奈川県川崎市域に、多くの骨蔵器が集中して分布しています。

今回の企画展では、立正大学博物館所蔵の骨蔵器にスポットをあてるとともに、古代の火葬墓として埼玉県川口市・吠原遺跡かますはら、中世の火葬墓として埼玉県行田市・築道下遺跡つきみちしたを取り上げました。

それぞれの時代の火葬・骨蔵器を通じて、古代・中世の葬送について見ていきたいと思えます。

平成22年7月

館長 池上 悟

目次

1. 火葬の始まり
2. 立正大学博物館所蔵の骨蔵器
3. 古代の骨蔵器
4. 中世の骨蔵器

例言

1. 本図録は、平成22年7月1日(木)～31日(土)に開催する第7回企画展展示図録として作成したものです。
2. 本図録は館長池上悟の指示のもとに博物館学芸員内田勇樹が編集しました。
3. 図録掲載の遺物写真は学芸員内田勇樹が撮影しました。
4. 企画展開催にあたり、以下の個人・機関にご協力を頂きました。
渡辺一・大谷徹・上尾市教育委員会・足利市教育委員会・川口市教育委員会・熊谷市教育委員会・熊谷市中央公民館・埼玉県立さきたま史跡の博物館・埼玉県立嵐山史跡の博物館・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
5. 企画展開催にあたって参考にした文献および写真・図面の引用文献は巻末に掲載しました。

1. 火葬の始まり

6世紀に仏教が大陸から伝わると、様々な文化の変化が訪れました。そのひとつとして火葬があります。

遺体を火で処理する行為自体は、縄文時代晩期などに焼骨の出土例が確認されています。また、古墳時代6世紀後半から7世紀初頭にかけては「窆塚」と呼ばれる高塚古墳がありますが、これは仏教的な葬法の一つとして捉えられるものではありません。

仏教的な火で遺体の処理を行い荼毘に付すという火葬は、『続日本紀』に記載されている文武天皇4(700)年に僧道昭が火葬されたことが最初と伝えられています。この道昭の火葬以降、天皇や官人層、高僧などは火葬を取り入れるようになりました。持統天皇は道昭火葬の2年後に火葬され、文祿麻呂(壬申の乱の功臣)、美努岡万(遣唐使)、太安萬侶(古事記編纂者)などの律令官人たちも火葬によって葬られています。

持統天皇は火葬された天皇としては最初の天皇であり、夫の天武天皇の古墳(野口王墓古墳)に追葬されています。この野口王墓古墳(天武・持統合葬陵)は、鎌倉時代の文暦2(1235)年の盗掘後の実見記録が伝えられています。

次いで文武天皇が慶雲4(707)年に火葬されていますが、この墳墓は中尾山古墳(八角形古墳)の可能性が高いものとされています。埋葬施設は内部が90cm四方の石槨であり、火葬骨を納めたものと想定されています。

畿内を中心とした上層官人層の墳墓には、被葬者の系譜・経歴・没年などを記した金属

製の墓誌を伴う例も知られています。小野毛人の677年を最古として18例が知られています。南武蔵地域を含む全国各地からは、幅の狭い長さ30cm程度の鉄板が出土しており、墓誌として使用されたものとも想定されています。

畿内では銅製容器や奈良三彩の壺を用いた高級な骨蔵器が多く見つっていますが、各地から出土する多くの骨蔵器には、須恵器の壺や土師器の甕の骨蔵器を利用した火葬が広まります。このように8世紀から火葬は全国的に普及し、多くの骨蔵器を伴う火葬墓が見つっています。

火葬の形態は土坑に骨蔵器を埋納するのが一般的ですが、石櫃と呼ばれる石製の長方状や円形の外容器に骨蔵器を収納するものや、骨蔵器の周囲を石で囲ったものなどもあります。

骨蔵器は、灰罎・骨壺などとも呼ばれ、火葬骨を納めて埋納するための容器です。材質は金銅・瑠璃・土・石・木製品などで、形態は壺形・甕形・櫃形・棺形・特殊な形(獸脚付短頸壺など)があります。しかし、各地から出土する多くの骨蔵器には、日常什器を転用して使用したものが多くあります。

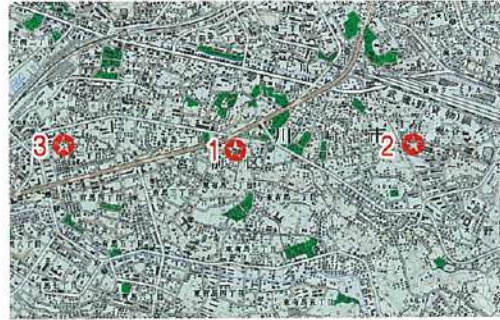
火葬普及時である武蔵国などの関東各地における奈良時代の火葬墓は、基本的には当時の官衙と関連する地区に分布しています。火葬墓は葬られた人物の階層により、埋葬施設・骨蔵器などの様相を異にしており、日常什器転用品ではない特別な骨蔵器などは、地方における相当な立場の人物を想定することができます。

2. 立正大学博物館所蔵の骨蔵器

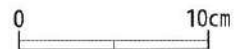
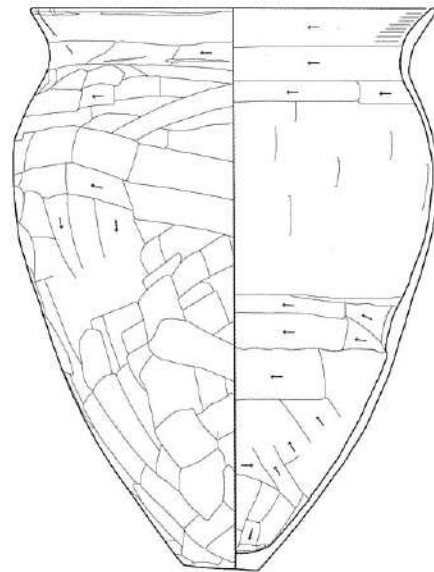
1. 甕 土師器（神奈川県川崎市宮前区有馬2386 付近出土）

神奈川県川崎市北西に位置する宮前区の有馬川左岸台地上で発見されました。出土状況などは不明ですが、発見された時の聞き取り調査では、骨蔵器は逆位に埋置されていたとされています。

武蔵型甕と称される土師器の甕を使用したもので、大きさは高さ 29.7 cm・口径 21.0 cm・底径 4.0 cmを測ります。



立正大学所蔵骨蔵器出土遺跡位置図



1. 神奈川県川崎市有馬出土土師器

大きさ：高 29.7cm, 口径 21.0cm, 底径 4.0cm
年代：平安時代（9世紀中葉）
所蔵：立正大学博物館

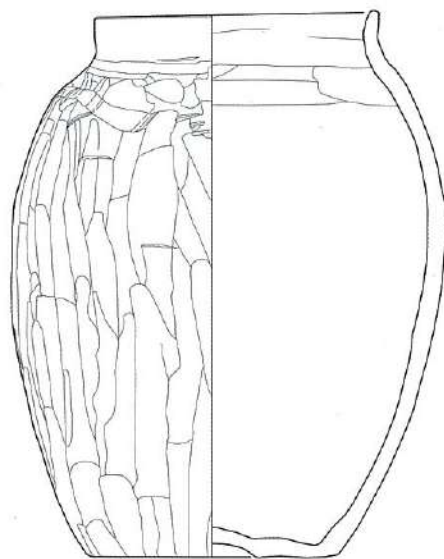
2. 壺 土師器（神奈川県川崎市宮前区梶ヶ谷 1417 出土）

1 の骨蔵器の出土地点から東へ約 1.5 km の標高約 40 m の台地上の先端部近くの南斜面上部より地主により発見されました。

骨蔵器は土師器甕を使用し、発見時点では須恵器の蓋を伴い地表下約 60 cm に正位の状

態で置かれていたといわれています。

この骨蔵器は、高さ 23.6 cm・口径 14.0 cm・底径 12.8 cm を測り、口縁部は約 2 cm 幅で直立し、下部から胴部中央へふくらみをもって広がり、また底部は中央が約 1 cm 上げ底になっています。底部外面には径約 6 cm の竜図的に打ち欠いた箇所があります。



2. 神奈川県川崎市梶ヶ谷出土骨蔵器

大きさ；高 23.6cm, 口径 14.0cm, 底径 12.8cm
年代；奈良時代（8世紀前～中葉）
所蔵；立正大学博物館

3. 甕 土師器（神奈川県川崎市宮前区有馬 1-9）

1の骨蔵器の出土地点から西へ約1.5kmの標高約40mの台地上の先端部近くの南斜面上部より地主により発見されました。発見後、立正大学久保常晴博士（名誉教授・1907年生～1978年没）により再発掘が行われ、遺構の状況が記録されています。

骨蔵器は土坑の中央部の木炭を敷いた上に正位の状態で発見され、発見時は同系の土器

によって蓋がされていたとされています。

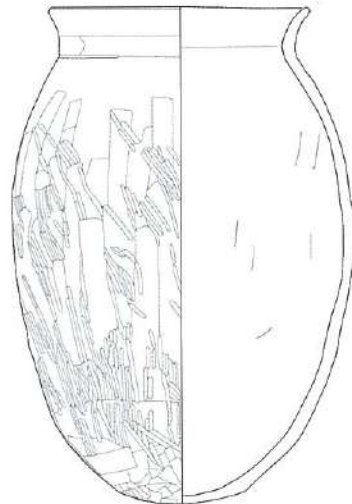
この骨蔵器は土師器甕を使用したもので、高さ39.4cm・口径20.1cm・底径10.0cmを測ります。再発掘の際に甕の底部が見つかり、同系の甕をあわせ口状に使用したと考えられます。

また、この骨蔵器の出土地点から東北東約8mのところから獣脚付短頸壺の骨蔵器が蓋付で出土しています。

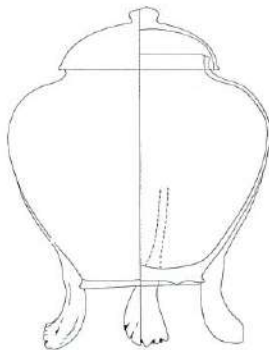


3. 神奈川県川崎市有馬出土骨蔵器

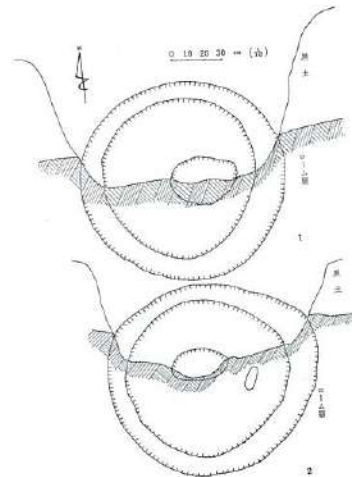
大きさ；高39.4cm，口径20.1cm，底径10.0cm
年代；平安時代（9世紀前～中葉）
所蔵；立正大学博物館



0 10cm



3の近くで出土した獣脚付骨蔵器
※文献1より転載



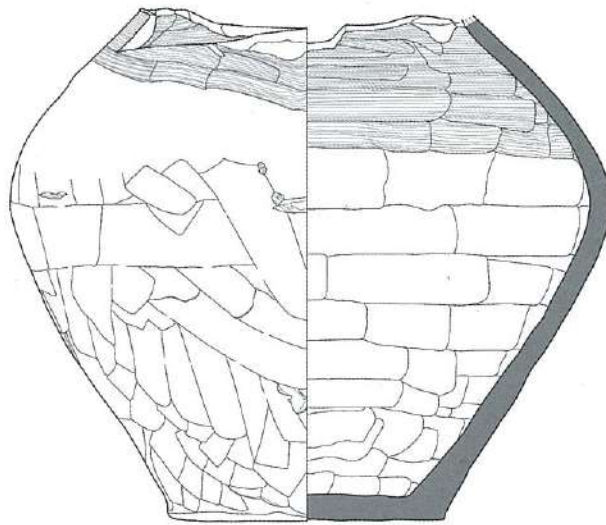
骨蔵器出土土坑平面および断面図
(1が獣脚付短頸壺、2が土師器の骨蔵器を出土した土坑)
※文献1より転載

4. 甕 常滑焼 (千葉県八日市場市宇吉田塚原古墳群)

大きさは残存高さ 27.0 cm・残存頸部径

17.8 cm・底径 14.6 cmを呈します。この骨蔵器は、円墳の墳丘中から出土しました。頸部で意図的に打ち欠いている

ことから骨蔵器の可能性が考えられます。



3. 出土地不明骨蔵器 常滑焼

大きさ：高 27.0cm, 口径 17.8cm, 底径 14.6cm

年代：中世

所蔵：立正大学博物館

3. 古代の骨蔵器

僧道昭が文武天皇4(700)年に火葬され、その後全国的に火葬が広がります。

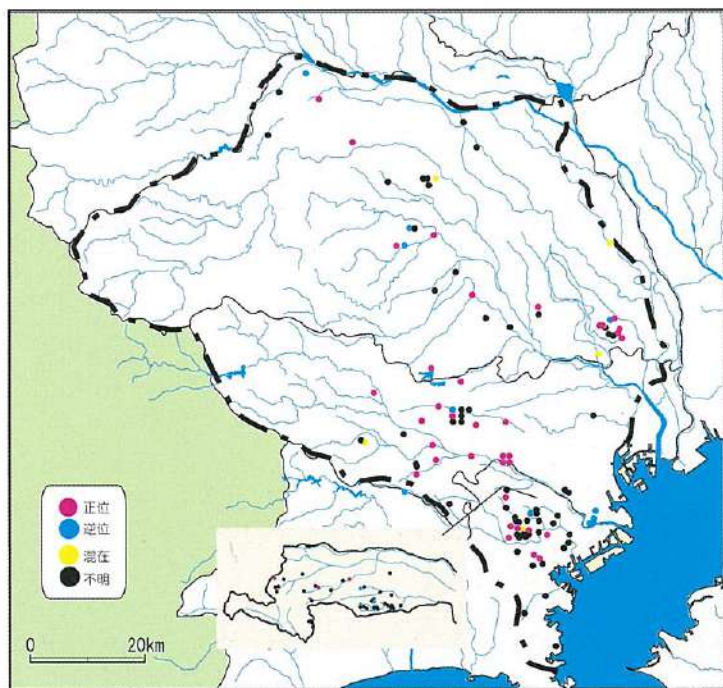
武蔵国(現在の埼玉県・東京都・神奈川県の一部)にも多くの骨蔵器を伴う火葬墓が見つっています。分布状況は、埼玉県川口市や神奈川県川崎市に非常に多く集中して見つかっています。

今回の展示では、古代の火葬の事例としてかますはら 吠原遺跡を取り上げました。吠原遺跡が存在する埼玉県川口市域は、多くの火葬墓が見つっています。なかでも吠原遺跡は8世紀後半～10世紀前半代にかけて3群21基もの火葬墓が検出されました。

多くの火葬墓の事例が1基ないしは3基程度まとまって発見されることがほとんどであるのに対し、吠原遺跡では多数の火葬墓が集中する貴重な発掘事例といえるものです。

骨蔵器の容器として多くは在地の甕が転用して使用されています。武蔵国においては、いわゆる武蔵型甕と称される口縁部がコの字状に曲がる甕が多用されます。また、一部においては須恵器短頸壺を用いた骨蔵器も見られます。

また、骨蔵器の埋納状態として、正位(口縁部を上にした状態)もしくは逆位(口縁部を下にした逆様の状態)の2形態があります。概ね正位の状態で出土していますが、多摩川下流域の川崎市南部や東京都大田区域では逆位の状態で出土している事例が多くみられます。埋納される遺構として土坑が一般的ですが、武蔵国における事例は少数ではありますが石櫃・木櫃も使用され、また古墳・横穴墓の再利用も認められます。



古代骨蔵器出土遺跡分布図

かますほら
叭原遺跡

(埼玉県川口市大字石神叭原)

叭原遺跡は、大宮台地南部に派生する鳩ヶ谷支台西部洪積台地上に立地します。

遺跡の発掘調査は昭和57年、58年に実施され、旧石器時代、縄文時代（草創期～晩期）、平安時代と、様々な時代に営まれた遺跡であることが分かりました。

その中で、平安時代の遺構は、火葬墓21基、土坑8基、住居跡1軒が確認されました。

火葬墓は立地場所によって、①、遺跡西側の南北に伸びる舌状台地の中央部、②、①の台地の基部、③、別の舌状台地の基部縁辺部、と大きく3つの群に分かれています。②と③の群は、調査時には既に周囲が大きく削平されていました。しかし平安時代には、遺跡の所在する台地が広範囲で墓域として利用されたと考えられます。



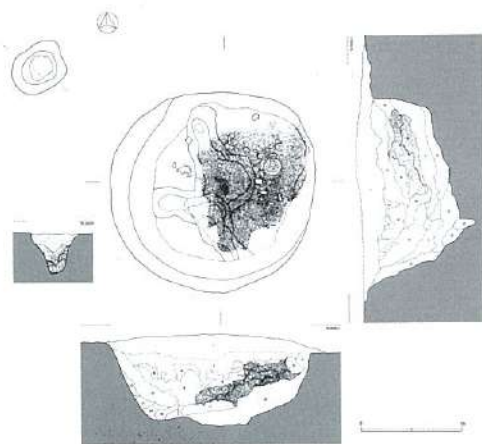
叭原遺跡位置図

火葬墓からは骨甕器が出土しており、須恵器のものが1点で、他は全て土師器です。埋納状態は、須恵器蓋・土師器甕転用被い等が、蓋・内蓋・被いに使用され、骨甕器も正位・逆位・合口など組合せが様々です。また、副葬品を伴うものもみられました。



叭原遺跡火葬墓分布図

※文献10より転載



吠原遺跡1号火葬墓出土状況図
※文献8より転載

1号火葬墓出土遺物

川口市指定文化財

大きさ；

1. 高 4.4cm, 口径 17.2cm,
2. 高 4.5cm, 口径 17.8cm,
3. 高 27.3cm, 口径 21.2cm, 底径 3.9cm

年代；平安時代（9世紀代）

所蔵；川口市教育委員会

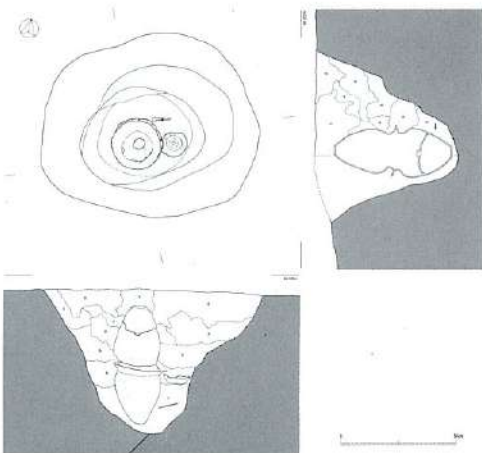


1

2



3



吠原遺跡5号火葬墓出土状況図
※文献8より転載

5号火葬墓出土遺物

川口市指定文化財

大きさ；

4. 高 4.1cm, 口径 17.3cm
5. 高 3.1cm, 口径 12.2cm
6. 高 27.1cm, 口径 21.8cm, 底径 4.3cm
7. 高 28.3cm, 口径 21.4cm, 底径 4.5cm

年代；平安時代（9世紀代）

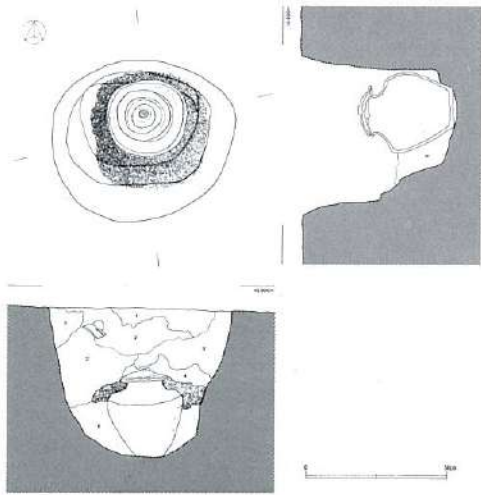
所蔵；川口市教育委員会



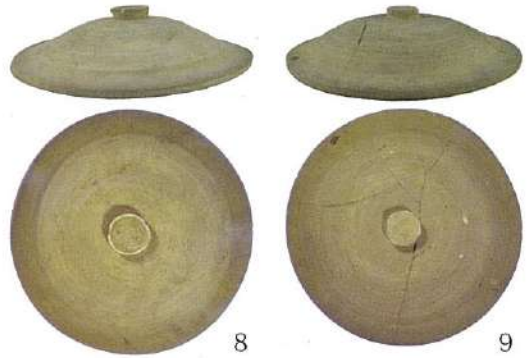
4



5



吠原遺跡 6号火葬墓出土状況図
※文献8より転載



6号火葬墓出土遺物

川口市指定文化財

大きさ;

8. 高 4.5cm, 口径 18.8cm

9. 高 4.2cm, 口径 18.2cm

10. 高 28.3cm, 口径 14.8cm, 底径 15.0cm

年 代; 平安時代 (8世紀後半)

所 蔵; 川口市教育委員会

宮林遺跡

(埼玉県深谷市永田字台山 1369 番地他)

宮林遺跡は荒川左岸に形成された櫛挽原台地の中位段丘南縁に立地し、その段丘崖に沿って東西に展開しています。

遺跡の発掘調査は昭和 58 年に実施され、土坑・集石・住居跡を含む竪穴状遺構・溝・骨炭器を伴う土壌及び近世墓が確認され、縄文時代から近世に至るまでの遺跡であることが分かりました。

その中で、遺跡の西に位置する土壌から正位の状態で骨炭器が出土しました。蓋には須恵器高蓋こつばんが逆位の状態で用いられ、その上に須恵器杯が伏せて置かれていました。また、骨炭器の下には石が数個敷かれ、2 枚の鉄板



宮林遺跡位置図

が両側に差し込まれていました。骨炭器内からは熱を受けた骨片が検出されました。その量が比較的に少ないことから分骨として埋葬されたことも考えられます。



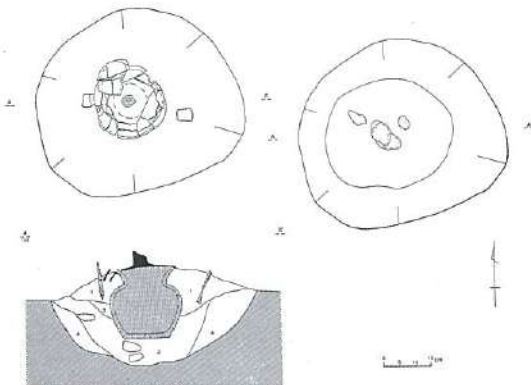
大きさ；高 4.0cm, 口径 12.7cm, 底径 7.3cm
年代；奈良・平安時代（8 世紀後半）
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館



大きさ；残存高 7.6cm, 口径 22.5cm
年代；奈良・平安時代（8 世紀後半）
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館



大きさ；高 23.1cm, 口径 18.8cm, 底径 14.2cm
年代；奈良・平安時代（8 世紀後半）
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館



骨炭器出土状況図

※文献 9 より転載

ちごさわきた
児沢北遺跡

(埼玉県東松山市岩殿字児沢 241 番地)

児沢北遺跡は、東松山市と鳩山町の境界にあたる物見山丘陵の、南東に突き出た尾根上にあります。周辺には、物見山塚群や南比企窯跡群等、多くの遺跡が分布しています。

遺跡の発掘調査は平成2年に実施されました。確認された遺構は、土坑21基、特殊土坑1基、ピット4基、火葬墓1基、土器集中遺構1基で、出土遺物は土器片などです。これらのことから、本遺跡は、奈良・平安時代の墓域と考えられます。

火葬墓からは須恵器の骨灰器が出土し、坏と蓋によって甕が密閉され、伏せられた状態で検出されました。



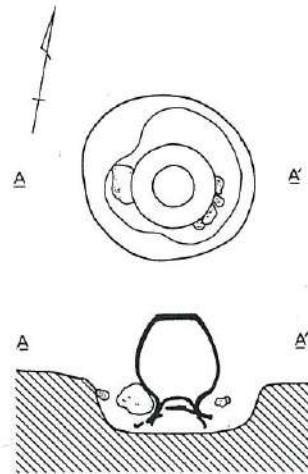
児沢北遺跡位置図

で検出されました。

なお、これらの須恵器は南比企窯跡群で生産されたものと考えられます。



大きさ；高 27.4cm, 口径 19.2cm, 底径 10.8cm
年代；平安時代 (9 世紀前半)
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館



0 50cm

骨蔵器出土状況図

※文献 16 より転載



大きさ；高 4.1cm, 口径 16.0cm
年代；平安時代 (9 世紀前半)
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館



大きさ；高 3.7cm, 口径 12.3cm, 底径 6.1cm
年代；平安時代 (9 世紀前半)
所 蔵；埼玉県立さきたま史跡の博物館

4. 中世の骨蔵器

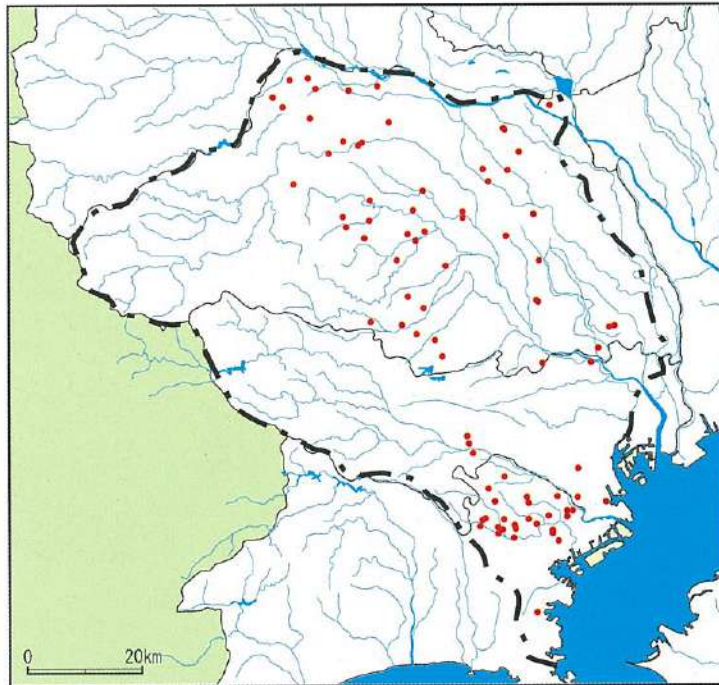
中世に入ると、それまで骨蔵器として一般に使われていた武蔵型甕などは使用されなくなり、小型の広口壺ひろくちつばなどが使用されるようになります。材質は常滑焼とこなね・瀬美焼せつみ・古瀬戸こせと・中国陶磁器などがありますが、最も一般的に使用されたのは在地で焼かれた陶器です。また、古代では埋納状態として正位・逆位の2形態が見られましたが、中世に入るとほぼ正位の状態で埋納されています。

今回の企画展では、中世武蔵国の骨蔵器の事例として埼玉県行田市築道下遺跡つきみちしたを取り上げました。築道下遺跡では、周堀が巡る方形で区画された“墓地”としての空間があります。その墓地では、五輪塔や板碑などとともに骨蔵器が埋納されていました。墓地内の火葬墓は3群に分かれ、それぞれが並行して火葬骨を埋納した墓地が造営されています。12世紀後半～14世紀中葉にかけて造営が行われていたことがわかりました。この墓地を

造営した氏族としては、武蔵武士の野氏が想定されています。

中世は武士団が台頭し、鎌倉仏教が展開していくと、それに伴い火葬墓も変容していきました。荘園制度による土地占有と浄土信仰の広まりにより、経塚や菩提所が展開し、石塔の造立が行われるようになります。その影響で方形区画された墓域などが形成され火葬が普及していきます。しかしながら、石塔を伴う火葬墓は、大名・有力家臣などの上位階層と下級家臣・一般民衆の階層において違いがあり、前者では整備された、後者では略式されたものと分かれていきます。また一般民衆・武士階層においては土葬の形態をとるようになります。

武士団や仏教拡大による社会の変容により、火葬のあり方も古代とは異なる意味を持ち墓塔の出現による埋葬形態についても変容していきました。



中世骨蔵器出土遺跡分布図

にしどわり
西通 I 遺跡

(埼玉県上尾市大字小敷谷字西通 1094 他)

西通 I 遺跡は、上尾市西側を南流する荒川の左岸台地上に位置し、周辺の台地傾斜面にも多くの遺跡が分布しています。

遺跡の発掘調査は、昭和 57 年に実施され、120 基を数える中世の土坑を中心に、地下式塀や井戸跡、堀跡などが発見されました。大型建物跡や堀跡など、中世の城館の要素である谷戸を中心とした舌状台地を利用していることなどから城館の可能性が考えられる遺跡です。

この中で第 46 号土坑からは古瀬戸灰釉草葉文瓶子が出土しました。遺跡の性格や出土状況などから骨葺器と断定するには難しいで

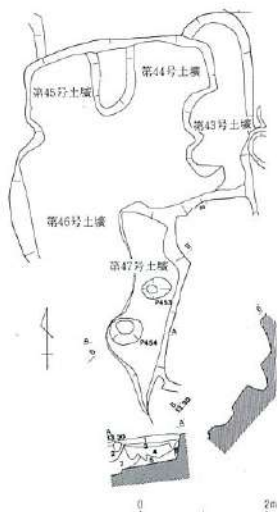


西通 I 遺跡位置図

すが、この瓶子は、他の遺跡から出土した骨葺器と同様に口縁部が意図的に打ち欠かれており、骨葺器として転用されたことが考えられます。



西通 I 遺跡全景写真 ※文献 7 より転載



骨葺器出土状況図
※文献 7 より一部加筆転載



古瀬戸灰釉草葉文瓶子

上尾市指定文化財

大きさ；高 23.7cm、胴部最大径 17.1cm、底径 9.3cm
年代；中世（14 世紀末）
所 蔵；上尾市教育委員会

築道下遺跡

(埼玉県行田市大字野字築道下)

築道下遺跡は元荒川左岸の自然堤防上に位置し、元荒川と行田市街地方面から南流する忍川の合流地点に立地しています。

遺跡の発掘調査は平成7年度から平成9年度の3年間にわたって調査が実施され、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡、古墳時代後期から中世にかけての掘立柱建物跡及び土塙・井戸跡・溝、中世墓跡・茶毘跡が確認されました。

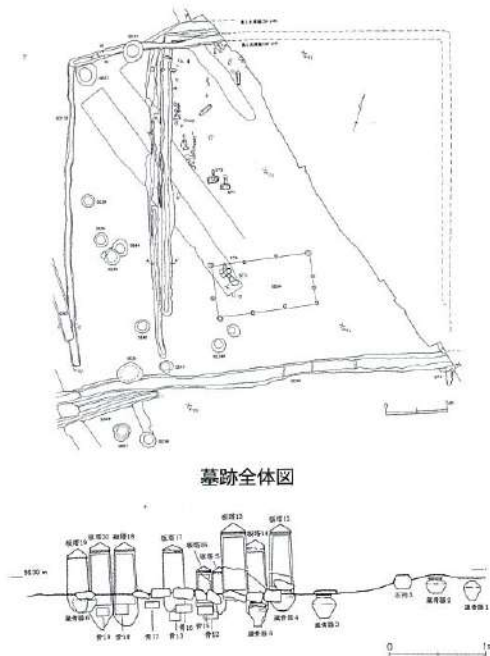
その中の、中世墓跡は元荒川が北東に湾曲した地域の北西に位置し、その埋葬施設群は北西隅部を中心に風堀に沿って帯状に展開されており、石列によって第1墓群、第2墓群、第3墓群に分けられ区画内及びその周辺からは板碑22基・その台石1基、五輪塔3基以上・骨蔵器6個・埋納焼骨23基が検出されています。



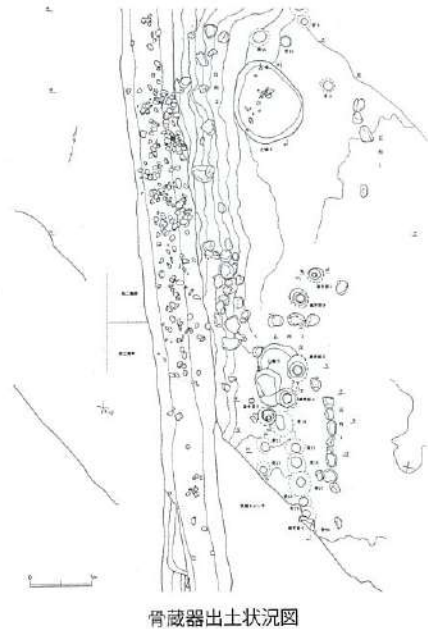
築道下遺跡位置図

骨蔵器は主に第2墓群、第3墓群において渥美焼、常滑焼、瓦質（在地産）などが出土しています。

墓地造営主体者は特定されていませんが、遺跡周辺には、多くの中世武士団がいたことが知られており、字名にも残る野氏などの武士団の墓地として造営されたことが想定されています。



第2・3墓群側面観 (板碑は復元)



骨蔵器出土状況図

※文献19より転載



壺 湿美焼 (第2 墓群出土)
 大きさ; 高 27.0cm, 胴部最大径 17.5cm, 底径 6.7cm
 年 代; 中世 (12 世紀中葉~後葉)



広口壺 在地産瓦質土器 (第3 墓群出土)
 大きさ; 高 24.1cm, 口径 16.8cm, 底径 11.5cm
 年 代; 中世 (13 世紀後葉~14 世紀前葉)



壺 常滑焼 (第2 墓群出土)
 大きさ; 高 17.2cm, 口径 14.7cm, 底径 14.5cm
 年 代; 中世 (13 世紀後半)



片口鉢 在地産瓦質土器 (第3 墓群出土)
 大きさ; 高 10.3cm, 口径 26.2cm, 底径 11.9cm
 年 代; 中世 (13 世紀後葉~14 世紀前葉)



片口鉢 山茶碗系 (第3 墓群出土)
 大きさ; 高 8.8cm, 口径 22.1cm, 高台径 10.5cm
 年 代; 中世 (13 世紀後葉)



広口壺 在地産瓦質土器 (第3 墓群出土)
 大きさ; 高 22.0cm, 口径 16.8cm, 底径 11.0cm
 年 代; 中世 (13 世紀後葉~14 世紀前葉)



古瀬戸灰釉瓶子 (第3 墓群出土)
 大きさ; 高 25.6cm, 胴部最大径 18.0cm, 底径 11.0cm
 年 代; 中世 (13 世紀末~14 世紀前葉)

かっぱやま
合羽山遺跡

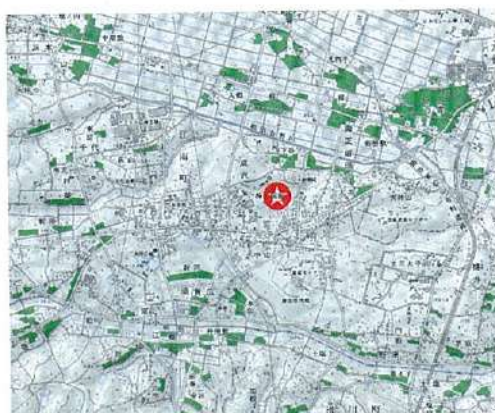
(埼玉県熊谷市成沢字静筒院前 1162 番地他)

合羽山遺跡は、旧石器時代以降、多くの遺跡が分布する荒川中流域右岸の江南台地上にあり、台地北縁部の東側へ舌状に伸びる段丘上に立地しています。

遺跡の発掘調査は平成 20 年に実施され、墓壇 1 基、土坑 2 基が確認されました。調査区は後世の攪乱を多く受けており、内容が明確な遺構はあまりありませんが、板碑片や台石のほか、骨葺器や土器片、陶磁器片などが出土していることから、中世の墓域と考えられます。

墓壇は平石を敷いて区画され、緑泥片岩を蓋石としていたと考えられます。墓壇からは渥美焼の壺が出土し、内部に骨が入っていたことから骨葺器として使用されていました。

この他にも、遺構外からの出土で、常滑焼の壺や瓦質の壺、羽釜などが確認されてお



合羽山遺跡位置図

り、これらの周囲から骨粉が検出されていることから骨葺器として使用されたと考えられます。

羽釜は散らばった状態で出土し、元の状況が不明でしたが、栃木県足利市の宿居館跡から同形の羽釜が骨葺器として使用され出土したことから、合羽山遺跡の羽釜も骨葺器として使用されたと考えられます。



羽釜
大きさ；高 16.3cm、口径 21.0cm
年代；中世（13 世紀後半）
所 蔵；熊谷市教育委員会



壺 渥美焼
大きさ；高 20.6cm、口径 10.4cm、底径 9.9 cm
年代；中世（12 世紀末）
所 蔵；熊谷市教育委員会



壺 常滑焼
大きさ；高 22.4cm、口径 9.9cm、底径 9.1cm
年代；中世（13 世紀末）
所 蔵；熊谷市教育委員会

しゆくきよかんめと
宿居館跡

(栃木県足利市山下町 1353 番地)

遺跡は栃木県の南部に位置する足利市の南西、渡良瀬川左岸の標高 53～58 m の山麓緩斜面に所在します。調査は平成 4 年 7 月～平成 5 年 1 月にかけて行われ、縄文時代～古墳時代の集落跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、溝跡、中世前半の墓域、中世後半の在地位武士の居館跡、近世以降の屋敷跡などが明らかとなっています。

調査区西側で墓域群が確認され、その中に骨蔵器を伴う火葬墓 2 基が検出されています。1 基 (S X - 05) は土師質の羽釜に伊勢型鍋に似た土鍋を蓋にして骨蔵器として使用しています。内部には火葬骨が入っていました。もう 1 基 (S X - 06) は在地位産の軟質



宿居館跡位置図

陶器の壺を骨蔵器として使用しています。こちらにも内部に火葬骨が入っていました。年代は遺物などから 14 世紀代と考えられます。

今回の展示では、埼玉県熊谷市の合羽山遺跡の羽釜の出土例として参考展示しました。



羽釜

大きさ；高 15.8cm, 口径 25.3cm, 底径 31.9cm

年代；中世 (14 世紀代)

所蔵；足利市教育委員会



骨蔵器出土状況写真

※文献 21 より転載



土鍋

大きさ；高 20.65cm, 口径 39.6cm

年代；中世 (14 世紀代)

所蔵；足利市教育委員会



壺 在地位産

大きさ；高 22.4cm, 口径 14.7cm, 底径 12.1cm

年代；中世 (14 世紀代)

所蔵；足利市教育委員会

記念講演会

「武蔵国における古代・中世の墓と骨蔵器」

講師 渡辺 一氏（大東文化大学非常勤講師）

日時；平成 22 年 7 月 24 日（土）

13 時～14 時 30 分

会場；熊谷市中央公民館

引用・参考文献

1. 久保常晴「川崎市有馬発見の骨蔵器」『銅鐸』第 8 号（立正大学考古学会 昭和 27(1952)年 2 月）
2. 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器（1）―蔵骨器を中心に―」『研究紀要』第 3 号（埼玉県立歴史資料館 昭和 56(1981)年 3 月）
3. 『墓地墓石大事典』（墓地墓石研究会 昭和 56(1981)年 8 月）
4. 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器（2）」『研究紀要』第 5 号（埼玉県立歴史資料館 昭和 58(1983)年 3 月）
5. 長谷川厚「歴史時代墳墓の成立と展開（1）―特に相模・南武蔵の火葬墓の様相を中心として―」『古代』第 75・76 号合併号（早稲田大学考古学会 昭和 58(1983)年 12 月）
6. 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器（3）」『研究紀要』第 6 号（埼玉県立歴史資料館 昭和 59(1984)年 3 月）
7. 上尾市文化財調査報告第 22 集『西通 1 遺跡』（上尾市教育委員会 昭和 60(1985)年 3 月）
8. 川口市遺跡調査会報告第 7 集『吹原遺跡―県立青陵高等学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』（川口市遺跡調査会昭和 60(1985)年 3 月）
9. 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第 50 集『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』（財）埼玉埋蔵文化財調査事業団 昭和 60(1980)年 3 月）
10. 『川口市史 考古編』（川口市 昭和 61(1986)年 3 月）
11. 長谷川厚「歴史時代墳墓の成立と展開（2）―特に南武蔵・相模の火葬墓の成立をめぐる―」『古代』第 84 号（早稲田大学考古学会 昭和 62(1987)年 9 月）
12. 『川口市文化財調査報告書第 25 集―吹原遺跡（考察編）―（県立青陵高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）』（川口市教育委員会 昭和 62(1987)年 3 月）
13. 長谷川厚「歴史時代墳墓の成立と展開（3）―南武蔵地域の展開期の火葬墓の構造と解釈をめぐる―」『古代』第 88 号（早稲田大学考古学会 平成元（1989）年 9 月）
14. 村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（上）―川崎市域における事例研究をふまえて―」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 2 集（川崎市市民ミュージアム 平成 2(1990)年 3 月）
15. 村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（下）―川崎市域における事例研究をふまえて―」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 3 集（川崎市市民ミュージアム 平成 3(1991)年 3 月）
16. 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第 104 集『児沢北遺跡』（財）埼玉埋蔵文化財調査事業団 平成 3(1991)年 3 月）
17. 桃崎祐輔「関東・甲信地域の様相」『シンポジウム「中世の火葬」―その展開と地域性―資料集』（東国歴史考古学研究所 平成 7(1995)年 10 月）
18. 『第 5 回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制―墓制をめぐる諸問題―』（東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会 平成 7(1995)年 11 月）
19. 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第 199 集『築道下遺跡Ⅱ』（財）埼玉埋蔵文化財調査事業団 平成 10(1998)年 3 月）
20. 春日肇「埼玉県南東部における古代火葬墓について」『埼玉考古』第 35 号（埼玉考古学会 平成 12(2000)年 3 月）
21. 足利市埋蔵文化財調査報告書第 45 集『宿居館跡発掘調査報告書』（足利市教育委員会文化課 平成 13(2001)年 3 月）
22. 『中世墓資料集成―関東編（1）―』（中世墓資料集成研究会 平成 17(2005)年 5 月）
23. 『中世墓資料集成―関東編（2）―』（中世墓資料集成研究会 平成 17(2005)年 5 月）
24. 『火葬と古代社会―死をめぐる文化の受容―』（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 平成 18(2006)年 3 月）
25. 『熊谷市合羽山遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書 合羽山遺跡』（熊谷市合羽山遺跡調査会 平成 21(2009)年 3 月）



第 7 回企画展

「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成 22 年 7 月 1 日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL 048-536-6150 / FAX 048-536-6170

E-mail museum@ris.ac.jp

URL <http://www.ris.ac.jp/museum/>

印刷・製本；アサヒ印刷株式会社